

「敗者」側の功績と精神を後世に伝える
——明治維新 150 周年に際しての拙編と思索

陶 徳民

一昨年の『吉田松陰と佐久間象山—開国初期の海外事情探索者たち（Ⅰ）—』に続いて、今年の三月に、『平山省齋と岩瀬忠震—開国初期の海外事情探索者たち（Ⅱ）—』を上梓した。ともに関西大学東西学術研究所の資料集刊である。扉絵として 19 世紀中葉の世界情勢の劇的変化と二人の主人公の奮闘の軌跡を描いたカラー図版 113 点、第一部は背景としてのミュアヘッド(中国名は慕維廉)『地理全志』と羅森『満清紀事』(ともに関西大学増田文庫所蔵)、第二部は『省齋年譜草案』と『省齋遺藁』(ともに東京大学史料編纂所所蔵)、第三部は忠震自筆の『輿地便覧』(香川大学神原文庫所蔵)と『瀛環表』(静嘉堂文庫蔵、大槻文庫旧蔵)、という構成である。両者の家系や年譜など伝記資料も盛り込んでいる。

明治維新一五〇周年にあたる今年に際しこのような編著を出したのは、安政期の外交で活躍し儒教的理念と世界的視野を持合せた二人の幕府の外交官、平山省齋と岩瀬忠震の代表作を提示することによって「敗者」側の功績と精神を後世に伝えたいからである。この二人の関係は一般的な上司と部下の関係を遙かに超えた同志間の信頼関係であり、その端的な証拠は、將軍継嗣問題で一橋慶喜擁立運動を展開する際、岩瀬は意思疎通のために度々秘密裏に平山を福井藩主松平春嶽のブレーン橋本左内のもとに遣わしたのであった。將軍継嗣問題だけでなく、開国通商問題においても、二人は歩調を合わせていた。高村直助氏が近著『永井尚志—皇国のため徳川家のため—』(二〇一五年)に、英使節渡来が予想されるなか、安政三年(一八五六)七月、二人が連名で「大船御取締・産物会所之儀に付申上候書付」を上申したと指摘している。戦時中に発表された松本順の論文「岩瀬忠震の思想的背景」(京都帝国大学『経済論叢』第五四卷第四号所収)も、安政四年(一八五七)暮れのハリス出府(幕府と通商交渉するために、ハリス米国総領事が下田の総領事館から江戸に参上)を待たず、二人はその前年九月下田に入港し、ポーリング香港総督の見解を伝達したオランダ船長ファビュスとの対談を通じて波風の荒い下田の替りに横浜を開港することが不可避という認識に至ったと論述している。岩瀬がまとめた当時の対談記録に、平山が「邂逅荷蘭客。匆匆扣路程。偶因一場話。粗通五洲情。況涉爪哇島。而遊龍動城。躑躅廟堂策。要拔萬邦精」という漢詩を書き、すなわちオランダ東インド会社本部所在地のインドネシア(「爪哇島」)、イギリスが中国から割譲した香港、ないしは大英帝国の首都ロンド

ン(「龍動」)など世界の情勢(「五洲情」)におおむね把握できたという。したがって、岩瀬がその翌年に一定の余裕をもってハリスと対面交渉を行うことができたわけである。

「温故知新」。拙編を通じて、読者諸賢とともに今日の世界も抱えている次のような三つの類似問題を考えたいと思う。

一、歴史の記述や評価の公正性と公平性

歴史は複数の異なった意志や構想をもつ人々の切磋琢磨、ないしは対立抗争の中で作られてきたものであり、失敗した選択肢の提案者の苦心、苦勞と功績をきちんと認めなければならない。しかし、現実的には、官製の公式歴史は往々として政治的主導権争いで勝ち抜けた勝者の苦心、苦勞と功績を過大評価し、敗者の苦心、苦勞と功績を抹殺しようとしている。事実、安政五か国条約の調印者の一人として岩瀬の知性、視野と手腕は交渉相手のアメリカ総領事ハリスおよびイギリスの伯爵エルギンにより高く評価されたということは、幕府の役人たちを「排外」・「保守」・「無能」として一概に否定してしまった「薩長史観」を覆す有力の証左となっている。

まず、前者のハリスは一八七一年、ニューヨーク市四番街で岩倉使節団の田辺太一書記官長、福地源一郎一等書記官と会見した時に次のように回顧談をした。福地『幕末政治家』によれば、ハリス(文中、「ハルリス」と記載)は「一面に米国の利益を謀ると与に、又一面には及ぶだけ日本の利益を謀り、刻苦して其草案を作りて提出し、是を議題として条項を議したるに、岩瀬は其条項に就きハルリスの説明を聴くと同時に其の得失を論じ、其中にも岩瀬の機敏なるや論難口を突て出で往々ハルリスをして答弁に苦ましめたる而已ならず、岩瀬に論破せられて其説に更めたる條款も多かりし」という(森篤男『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』)。

一方、伯爵エルギンは、次のように岩瀬など日本側の交渉委員を称えている。「昨日の船で知り合った提督永井玄蕃頭 Nangai Gembano kami と、名を肥後守 Higono-kami と呼ぶ愉快的な仲間とがいた。この男は私が日本で出会ったもっとも愛想のよい、また教養に富んだ人物である。」「われわれはいよいよ条約の主文に入ることができた。委員たちが、細目の要旨を論議するのに最大の英智を示し、提示されたあらゆる疑点の論理的説明を完全に理解するまでは決して了承しないことが、すぐにわかった。」「私は彼らがてきぱきとその仕事を処理していくのに感銘を受けました。すなわちきわめて鋭い観測を行ない、実に要領を得た質問を發し、しかもあらさがしをしたり、とがめ立てをするような気持は少しもなかったのです。もちろん彼らの批判には、外国事務についての知識が不十分の結果によることもありました。そしてときには彼らのためらいを取り除くために、原文を、改善するのではなく、変更することも必要でした。しかし、全体からみて、私は、これまでに交渉をもった相手で、彼らほど、その知識の及ぶかぎり、道理を

わきまえていると思われたものはなかったと断言できます。」(岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』)。

岡目八目。岩瀬、永井など幕府の交渉委員の優秀さとその開国進取の精神に関するハリスとエルギンの証言は、「薩長史観」による幕府批判と比べれば、はるかに公正、公平の評価であったといえるだろう。

二、国際交易・交渉における利欲、道義心と権力政治

約二十年前、はじめてペリー艦隊に随行した清国人羅森の『日本日記』により「平山謙二郎」という学問にすぐれた立派な人物を知り、その後、イェール大学図書館において羅森の上司である首席通訳官 S・W・ウィリアムズ(中国名は衛三畏)が旧蔵の平山自筆による筆談記録も発見した。とくに羅森に宛てた手紙において、平山が孔孟の天道人道・四海同胞の思想を世界各国の為政者に宣伝するように羅森に依頼したという一節に触れる際、自分の目を疑った。「道学自任」という平山の面目躍如といわねばなりません。では、平山はどのような背景で羅森に頼み、またその依頼状にどのような論理展開を見せていたのだろうか。

一八五四年当時の平山は横浜で米艦応接にかかわる徒目付であるため、米艦随行の広東人羅森に、清朝で起きた太平天国の乱の様子について打診した。その要求に応じて、羅森は『南京紀事』と『治安策』を書いた。会話できず筆談により意思疎通している二人の間に、思う存分に意見交換するために、ついに書状の遣り取りをした。平山の依頼は、まさに『南京紀事』と『治安策』を羅森に返却する際の書状のなかで行われたものである。そこで、次のような議論を展開しているのである。

圧政と賄賂が公に行われることは、「古代から現在まで、これは傾きつつある帝国に共通する病です。このような国の悪の根源は、欲の一語で表わせると思います。この欲はすべての人間にあり、これこそがすべての悪を育むのです。孔子は、欲を生じる心を戒めようと望み、利についてはほとんど語っていません。これも、われわれの先人たちが外国との交流を絶った理由の一つです。といいますのも、欲がありますと無知な人間は道を失い、道を踏み誤った人々には道を追求したせつかくのすばらしい学問も意味をなさず、彼らは集まって利益を得ようと争い、焦ってなにかすばらしいものを得ようとしたため、ついには子としての義務、謙遜、羞恥心を忘れてしまったのです。」「天の道は偉大です。宇宙全体のすべての物を育みます。氷の海の暗黒の国にさえ、天と地の子でない人間はいないのです。隣人を愛し、みなと仲良く暮らさねばならないのです。このため、賢人たちは、誰彼

の区別なくすべての人々を同じ慈悲深さで抱擁したのです。相互交流という原則は、世界のどこでも共通です。大切なのは礼儀、親切、誠意、正義です。これを守るならば尊い調和が広がり、天地の心があますところなく現われるのです。これとは逆に、利益だけを求めて商売を行なえば、争いや訴訟が起こり、喜びではなく呪いとなります。「あなたはいま、合衆国の船に乗って海を旅していらっしやいます。(中略) あなたの行く先々で、その国と統治者にこの原則を説いてくださるようお願いいたします。そうすれば、孔子と孟子の願いが、何世紀も経過してやっと世界全体を明るく照らすようになるでしょう」と(オフィス宮崎訳『ペリー艦隊日本遠征記』第二巻)。

ここに見えているのは、まさに利益よりも道義を重んじる孔子の義利観、および北宋の張載『西銘』における「民胞物與」という名言に凝縮されている朱子学的世界観である。すなわち天下の民はすべてわが同胞であり、天下の物はすべてわが仲間である、という天人合一、人物同類の宇宙像である。その意味において、利欲に駆動される商売よりも、社会の調和と隣人愛を重んじる道義心の堅持が唱えられているのである。

若き日の平山は、『伊洛淵源録』(朱子学の集大成者である朱熹が編纂した周敦頤、程顥、程頤、張載、邵雍およびその弟子たちの行状、墓志銘と言行などをまとめた賢人記録)を熟読し、「天地神明」に、もし将来大任を負う機会があれば、私利私欲のためではなく、必ず「天下の蒼生」(＝万民)のために尽くすと誓ったことがあった(「幕府參政平山圖書頭としての平山省齋翁と維新當時の其文章(其一)」における「省齋自叙」、雑誌『江戸』第二号所収)。平山はこの誓いは一生貫いたが、羅森に対するこの依頼状もその強い意志を反映している。ちなみに、扉絵(カラー図版集)の図18平山省齋書幅「洋々四海一家春」(洋々四海一家春。義雨仁風率土濱。萬里長征凱旋日。坤輿那國不休寘。)や図19平山省齋書幅「日月燈明五洲城」(日月燈明五洲城。蒸蒸世物属同胞。慈母眼中皆赤子。堪輿冲處不助勞。)なども、その同じ思想と胸襟を漢詩の形で表していると言える。

一方、岩瀬も儒学の造詣に深く、甲府の徽典館学頭と昌平黌の教授などをつとめた。扉絵(カラー図版集)の図32岩瀬忠震筆扇面「茫々堪輿」(茫々堪輿。俯仰無垠。人於其間。眇然有身。<中略>參為三才。曰惟爾心。往古來今。孰無此心。心為形役。迺獸乃禽。<中略>君子存誠。享念享敬。天君泰然。百体從令。)と図29岩瀬忠震書幅「晋人清談宋人理学」(晋人清談。宋人理学。以晋人遣俗。以宋人禔身。合之雙美。分之兩備也。)などは、儒教と道教に対するその理解と玩味のほどを現わしている。天下国家のためという思いが強い岩瀬は開国交易論を提唱していると同時に、急進的な開国交易政策がもたらす国内の混乱と人心の分離を警戒している。

ハリスとの交渉時、彼は、「其方には利を主とし、此方は、人心居合を主とし候故、何分一決致し兼候」(十二月十四日)、「日本於而は、心和を貴ひ、人心え嚮応する処を以て、政治を施候事故、衆庶の不欲事は難致事に候」、更には、「一体日本の人気は、一致いたし候国風に付、万一之儀出来致し候節は、支那土人之如きに無之、衆心一同いたし、其末如何可相成哉、此处実に掛念之第一に有之」(十二月十六日)と、自分の心配事を再三表明している(前掲松本論文)。

面白いことに、アメリカ側の宥和政策を示す文面に、張載の「民胞物與」という名言も使われている。安政元年(一八五四)、ウィリアムズが箱館にて作り、その広東人秘書羅森に漢訳してもらい、松前藩の家老、松前勘解由に進呈した扇面における一節は「本艦即將揚帆別往。今有煩言陳子。如後亜国或有船至此。祈願臺駕以民胞物與之懷。盡心力以照保約行事」とあり、「民胞物與」の博愛心をもって今後やってくるアメリカの船に接し、条約の義務を履行しなさいと要望している。この言葉遣いは、一体ウィリアムズの特別指示によるものか(ウィリアムズはペリー来航に随行するまで二〇年間の中国滞在歴があり、名著『中国総論』の初版も出版している)、それとも羅森の翻訳時の修飾によるものかは知る由がないが、「民胞物與」という名言は当時東アジア諸国の上層階級の共通教養と知識の一部となっていたため、自説の論理展開によく活用されていることが明らかであろう。

しかし、以上のような理想的国際関係像とは裏腹に、現実の一九世紀中葉の国際関係には砲艦外交が頻発する厳しいものでもあった。例えば、昌平黌教授で西洋事情と海防問題にも詳しい古賀侗庵が弟子箕作省吾の名著『坤輿図識』(一八四五年)に寄せた序文に次のような冷静な国際観を示している。世界の諸国には、二つの類型がある。一つは「確然として自守、士を養ひ民を字み、国勢をして金瓶の缺くこと無きが如くせしむる」国であり、もう一つは、「遠略を是れ事し、貿易を務め交際を重んじ、敵国に鬻有らば、襲ひて之れを取る」国である。前者は「崇義」「寡欲」であるのに対して、後者は「貪憊」「残暴」であって、「優劣枉直」の道義的な立場からすれば、前者が優位にあることは言を俟たない。にもかかわらず、現実の軍勢力・経済力という立場から言えば、「確然として自守する者は、間く或は競はず。而れども遠略を是れ事とする者は往々盛強」である。(中略)万国情形を見ると、今この時点で、「隣交を締ばず、辺防を修めずして、確然として自守することは、断じて為すべからざる者有」る。それでは、どうすればよいのか。「蓋し必ず外夷を雷征するの勢有りて、然る後に一国を退保すべし。敵人を威懾するの略有りて、然る後に固く盟約を申ぬべし」と説いて、力を伴った道義を求めるのである(前田勉『江戸後期の思想空間』)。

三、情報や知識の更新と公開の重要性

周知のように、アヘン戦争敗北後の中国で編纂された世界地理書の代表作は魏源の『海国図志』である。源了圓氏によれば、日本における『海国図志』の「翻刻」は二三種を数え、そのうち二二種が嘉永七・安政元年から安政三年までの三年間に「集中的に出版されている」という（同「幕末・維新时期における『海国図志』の受容—佐久間象山を中心として—」）。ペリー来航がもたらす未曾有の衝撃に対処するため、日本人はいかに世界の地理歴史知識や中国の経験教訓を貪欲に吸収しようとしていたかがよく分かる。しかし、無視できないのは、『海国図志』に盛り込まれたのは主として一八三〇年代の西洋由来の世界地理知識であり、まさにペリー来航の一八五三年と一八五四年に、しかもペリー艦隊が経由した上海の地においてイギリス人宣教師ミュアヘッド(中国名は慕維廉)が編纂した最先端の世界地理書『地理全志』が刊行された、という事実である。しかも、そのなかの「東洋羣島志」に、ペリー来航の意図は、難破したアメリカ捕鯨船の船員を虐めた日本人に報復することであり、日本側の対応次第、戦争になる恐れがある(原文は「常有亞墨利加漁船至此。觸石遭險。船楫損壞時。遇買日用之資。日本人輒欺侮之。故亞墨利加人時存報復之念。現有數兵船將至。強令日本人敬重。否則恐有戰爭之虞」と伝えてい

るのである。言うまでもなく、岩瀬は早くもこの重要な情報をキャッチした。安政五年(一八五八)二月十三日京都にいた岩瀬などは、武家伝奏(武家と朝廷の意思疎通を担う役職者)に対する外国事情紹介の覚書に「昨日年(一八五七年・丁巳一筆者)、唐船持越候英吉利人漢文之著述地理全志中、亞墨利加人御国を開候見込拒む時は、戦争に可及旨、認め有之候事」と述べている。しかも次のように英学の促進を唱道しているのである。「凡そ国家の志士たる者は英国の言語を学ばざるべからず、英語は米国の国語となれるのみならず、広く亞細亞の要地に通用せり。且英国は貿易は勿論、海軍も盛大にして文武百芸諸国に冠たり、和蘭の如きは萎靡不振、学ぶに足るものなし」と語り、自らは安政五年七月三日の橋本左内への書簡においては、Sanai 様、Higo と綴っている(前掲松本論文)。おそらくこの時点から、情報と知識がアップデートされたこの『地理全志』の価値を認め、翌年の夏について私財を投じて同書の和刻をしたのだろう。

高原泉氏が「幕末における幕府吏僚の出版—川路聖謨と岩瀬忠震の場合—」(二〇〇九年)において、蕃書調所(洋書調所、開成所)による出版活動を考察するための前提として、川路聖謨と岩瀬忠震という二人の幕府吏僚における出版に関わる事例を検討した結果、次のような結論に至った。川路における『海国図志』の出版においては、正確な知の公開と共有といった発想が川路にみられることに加え、そこに佐久間象山の影響を読みとれる。岩瀬については、条約書の刊行という幕府自身の手による情報の公開に「固陋之議論」の解消と「人心折合」(人々の意識に変化を生み出すこと)への期待が込められ、自費でおこなった『地理全志』については、それ

が自らの処分を予見しつつなされた可能性もある。いずれにせよ、両者とも「出版のもつ力」を強く意識していたとみることができる、と。参考に値する重要な見解と言えよう。

注目すべきは、『海国図志』と『地理全志』の両書が和刻される際の訓点は、ともに幕末の著名な海防論者で昌平黌教授でもあった塩谷宕陰が施したのであった。三十数年前、上海復旦大学で幕末・明治初期における日英関係に関する修士論文を執筆中、本学の故大庭脩教授の受け入れで来日し資料収集を行った。その時の収集目標は、まさに塩谷の『阿芙蓉彙聞』やアーネスト・サトウの『英国策論』などであった。増田渉の名著『西学東漸と中国事情』の存在もその時に気づき、「薩長史観」という言葉もはじめて大庭『江戸時代の日中秘話』より知ったものである。二〇〇〇年前後以降、本学の同僚松浦章、内田慶市と沈国威諸教授が共編された『遐邇貫珍の研究』などのお仕事の刺激により、羅森と吉田松陰、S・W・ウィリアムズなどの繋がりを追跡し、いくつかの発見ができた。これらのご縁とヒントが本書と前編、すなわち『開国初期の海外事情探索者たち』の(Ⅱ)と(Ⅰ)を編集するモチーフになったと言える。記して御礼を申し上げる。

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- I. 西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- II. 西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- III. 近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- IV. 欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- V. 宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- VI. 漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- VII. その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

1. 年3回程度の研究会
2. 年2回の会誌『或問』の発行
3. 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
4. インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
5. (4)のための各種資料のデータベースの制作
6. 内外研究者との積極的な学術交流

会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。

本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学文学部中国語中国文学科
内田慶市研究室 (Tel.ダイヤルイン 06-6368-0431)

E-mail: u_keiichi@mac.com

URL: <http://keiuchid.sakura.ne.jp>

代表世話人：内田慶市